

紀

要

第 15 号

2002. 3

滋賀県文化財保護協会
法人

遠賀川系壺形土器についての基礎考察(1)

— 広口細頸化のプロセス —

松 室 孝 樹

1. はじめに

滋賀県下における弥生時代前期、特に遠賀川系土器についての研究は、資料の蓄積がなされてきたにもかかわらず、他地域と比較したとき、必ずしも活況を呈している、といった状況ではない。

これまでの研究を辿ると、遠賀川系土器の型式組列(実際には弥生前期を通じて型式変化が顕著で認識が比較的容易な壺形土器が主となる)は、基本的には口頸界・頸胴界に施される紋様(段・篋描直線紋・削出突帯・貼付突帯)の消長、あるいは頸部の長頸(細頸)化傾向、という大きく2点を基軸に据えることによって説明されてきた。代表的なものとしては佐原眞の3段階区分論(佐原1967)が挙げられよう。また近年では、佐原の提示したような段→削出突帯→貼付突帯、といった明快な型式組列は実際の出土例からは導き出せず、むしろ各種紋様は遠賀川系土器が導入された段階で、ある程度出揃っていた、という考えが各研究者から提示されるようになってきた(井藤1983・田畑1997など)。しかしながら、これまでに提示されてきた様々な遠賀川系土器の編年案などを見ると、各種紋様あるいは篋描直線紋(以下「直線紋」と略称)の条数などの条件については佐原以来の定義をほぼそのまま踏襲しているようにも見受けられる。すなわち、佐原の定義した篋描直線紋⁽¹⁾「少条」「多条」・「区分紋様から帯状紋様」などについて、私たちは厳密に再吟味を行ってきたであろうか。

小稿での課題は、いま一度、佐原の定義した各種紋様の分類、より限定するならば、「少条」「多条」の意味について改めて問い直すことにある。さらに、この問題については、頸部の広口細頸化のプロセスについても併せて考える必要があるので、両者を複合し、以下の分析の対象とした。

2. 問題点の抽出

佐原眞は、京都府雲宮遺跡出土土器をもとに、畿

内地域の遠賀川系土器の型式学的検討を試みた(佐原1967)。ここで佐原の研究を改めて紹介するのは紙面の都合もあり割愛するが、その論点の基軸が壺の口頸界・頸胴界の紋様について、区分紋様から帯状紋様への型式学的変遷にあることは論を俟たないだろう。その具体例として、口頸界・頸胴界に施紋される直線紋の条数について、その多寡は型式差(時間(時期)差を含む概念として)表しているものと考えた点に大きな特色がある。

ただし、直線紋条数の多寡のみをもって「条数が少なければ古い(区分紋様)」「条数が多ければ新しい(帯状紋様)」といった、半ば教条的な考え方にとらわれてしまう危惧もなくはない。

いっぽうで、藤田三郎・松本洋明は、大和地域の遠賀川系土器を編年するなかで、従来の前期=篋描紋・中期=櫛描紋という分類とは異なり、遠賀川系土器文化の解体现象として、広口長頸壺の出現をもって前期と中期を画する、という考え方を示した(藤田・松本1989)。この様式・編年案は、これまでの篋描紋から櫛描紋へ、という施紋原理の区分に基づく、弥生前期・中期土器の区分とは全く異なるもので、批判も多いが、広口壺に限定するならば、施紋だけでなくプロポーシオンにも目配りを施した点、より複合的な視点から広口壺の型式変化を捉えた、という意味では評価されるべきものとする。

ただし、これについてもまったく問題がないわけではない。藤田・松本によれば、従来前期後葉と考えられてきた段階(佐原編年の畿内第Ⅰ様式新段階、藤田・松本編年の大和第Ⅱ様式)は、彼らによれば、広口壺の長頸化が始まり、口頸界の直線紋も集中し多条化が始まる段階としているが、なに(どのような形態)をもって長頸化というか、ということになると具体的な説明はなされていない。すなわち、どの段階をもって「帯状紋様」・「広口壺の長頸化」へと変化するかは、現状では不明瞭といわざるを得ない。これはつまるところ、資料基準を一定化していない

ところに起因する、と考える。

本稿では、佐原の示した区分紋様から帯状紋様へ(条数の増加)、という型式学的変遷と長頸(細頸)化のプロセスを上記の問題点を意識しつつ再検討することにあり、その具体的方法として資料の数値化を試み、それに基づいて論を進めるよう努めた。

3. 作業の前提

(1) 分析の対象

分析の対象としては、遠賀川系統土器のなかでも甕・鉢などと比較して型式組列が明確な壺形土器(以下「壺」と略称、今回は口縁部が外反して立ち上がる広口壺に限定)を取り上げた。

広口壺を分析の対象とした理由については、

a) 甕・鉢の型式変化が前期という時間幅のなかで顕著に認められないのに対し、広口壺は前期を通じて口縁部の発達(広口化)が顕著に進み、また頸部もそれに呼応して細くなる傾向(細頸化)が確認されていることから、型式の変遷が比較的容易に理解しやすいこと。

くわえて、

b) これらの型式変化に連動して、直線紋の条数が次第に増加し、それが極まって櫛描紋に移行する、という型式学的変遷が想定されていること。⁽²⁾

などを理由として挙げておきたい。

具体的な分析方法としては、①：各遺跡出土資料の数値化(各種紋様・直線紋の条数の確認、および頸口率・頸胴率・胴高率の算出)、②：これらを複合してグルーピング作業を実施、③：①・②から導き出せる広口細頸化のプロセスの把握を行う。

(2) 地域設定

本稿では小津浜遺跡出土資料を主たる分析対象としているが、⁽³⁾小津浜遺跡のみを対象とした分析結果がはたして周辺地域にも汎用性のあるものなのか、あるいは小津浜遺跡独自で、他の同時期の遺跡資料とはそのあり方が大きく異なるものなのかは、他遺跡の資料との比較・検討を通してでない限り明確にならないものと考え。また、小津浜遺跡では良好な一括資料が極めて少なく、グルーピングを行った際に各グループの共時性の是非を論じるには不都合が生じる。そこで本稿では、小津浜遺跡以外の資料も

比較対象として取り上げることとしたが、ここではその設定基準について述べておきたい。

対象遺跡としては、小津浜遺跡に近接する遺跡の資料を取り上げるのが望ましいが、現時点でなお資料の不足は否めないことから、⁽⁴⁾比較的資料の蓄積がなされている京都・大阪・奈良・兵庫の各府県の資料を用いることとする。遺跡の選択にあたっては、資料数が比較的多いことを第一義的な条件としている。⁽⁵⁾

(3) 作業手順

遠賀川系広口壺の口縁部は、頸部から緩やかに外反しながら立ち上がる形状をとるものが通有である。ただし、小津浜遺跡から出土した壺の中で広口壺としたものが、すべて同一の規格を有しているわけではなく、そこには一定程度の相異の幅が見出せる。以下は、その相異の幅を数値化する作業である。具体的には口縁部の広口化傾向、頸部の細頸化傾向を数値化する作業を行った。

口縁部の広口化を数値で表す具体的作業としては、頸部径を口径で除した数値を求めた(頸口率)。頸部径は最小値を示す箇所計測し、口径は内法ではなく、器肉を含んだ外法で計測している。また、細頸化を数値で表す具体的作業としては、胴部最大径を頸部径で除した数値を求めた(頸胴率)。

表1～4は、今回分析対象とした遺跡出土の広口壺のうち、頸口率・頸胴率・胴高率が計測できた資料の一覧である。紋様帯の完結している資料が最善であるが、資料の母数は多い方が誤差は少なくなる考え、紋様帯の完結していない資料についても計測している(「 $\dots + \alpha$ 」とした資料)。また、参考資料として計測した近畿各遺跡の資料については、すべて報告書からの計測値である。

4. 作業の結果

(1) 頸口率と口頸界紋様の関係

図1～3は小津浜遺跡をはじめとする各遺跡の資料を用いて計測した、頸口率と口頸界紋様の関係を示したグラフである。横軸の直線紋条数について補足しておく、a) 段(逆段も含む)単独・削出突帯第I種は0条としてカウント、b) 「 $\dots + \alpha$ 」とした資料は各条数の中間にプロット(例えば「6 +

α]条ならば6条と7条の間、というように)、c) 貼付突帯⁽⁶⁾と直線紋が混在している場合は両者の和を条数として計測した。

頸口率については、全遺跡を総合すると0.39～0.92の範囲に収まる。最も頸口率の低い資料は小津浜遺跡、逆に最も高い資料は大阪府山賀遺跡・京都府雲宮遺跡で確認した。

口頸界紋様については、段・逆段・削出突帯・貼付突帯・直線紋・無紋があり、このうち段・逆段・削出突帯・貼付突帯については直線紋と混在する場合がまま認められる。以下、小津浜遺跡資料の検討を行ったのち、各遺跡の傾向および個々の施紋種類について、頸口率との関係から特徴を抽出していく。

(2) 小津浜遺跡出土資料での作業結果

小津浜遺跡出土資料における頸口率と直線紋条数の関係については図1にまとめたが、その結果、頸口率の最低値は0.39、最高値は0.86であった。

最初に大まかな傾向として、頸口率の値が低くなるにつれ直線紋条数が増加する傾向(条数の多寡の差が大きくなる)にある、という点が指摘できる。このように頸口率と直線紋条数の関係についてみると、おおよそではあるが0.75～0.90(～3条、以下「第1群」)、0.65～0.75(～4条、以下「第2群」)、0.55～0.65(～10条、以下「第3群」)、0.40～0.55(～10条以上、以下「第4群」)、のそれぞれにグルーピングすることができる。また、これら4つのグループ内にはいずれも段・削出突帯・貼付突帯・直線紋などの各種紋様、あるいは無紋資料が認められる。

第1群の資料については、直線紋・段の資料が大半を占めるが、1点のみ貼付突帯が認められる(600)。削出突帯については、小津浜遺跡に関しては本群ではほとんど認められない。その他の傾向としては、大型品の大半が頸口率0.80～0.90の範囲に集中することが挙げられよう。

第2群では、第1群でほとんど認められなかった逆段が急激に増加する状況が認められる。口頸界の直線紋条数は4条までが主体となるが、逆段に9条の直線紋が付随する事例も確認している(1134)。無紋資料については、第1群と変わらず一定量を占める。

第3群は、さらに直線紋条数が増加し、1～10条程度のものが確認できる。段資料はほとんど認められなくなる一方、逆段資料の増加が著しい。また、貼付突帯も一定量認められるようになる。

第4群では、さらに直線紋条数の増加傾向が著しいが、大半は10条以下に存在し、10条以上の資料の占める比率はさほど高くはない。紋様については直線紋・貼付突帯が大半を占める。段・削出突帯・逆段資料は減少傾向が著しい。本群の特徴としては、第1～3群ではほとんど認められなかった、複合施紋資料が出現・盛行することである。大半は直線紋帯の上下端あるいは片側に貼付突帯が付随するパターンであるが、突帯7条の下に直線紋5条が施紋される事例も確認している(644)⁽⁷⁾。その他の複合施紋例としては、段に貼付突帯が伴う事例を確認している(3211)。この他の特徴としては、第1群に集中して見られた大型品が第4群でも再び認められるようになる(3253)。

次に各群における各紋様のあり方について確認しておこう。

段資料は11例確認した。第1～4群に存在するが、その大半は第1・2群である。段の成形方法は粘土帯接合面を利用したものではなく、削出技法によるものであった(後述)。段資料は単独施紋された資料だけでなく、直線紋を伴うものが半数弱存在する。直線紋多条資料も確認できるが(1125(7条)など)、大半は直線紋少条が伴う資料であった。また、貼付突帯と組み合わせる例も確認している(3211)⁽⁸⁾。

上向きに段の関く逆段資料は、第2～4群で10例確認している。逆段が単独で施紋されている事例は確認できず、すべて直線紋と組み合わせる。最も直線紋条数の多いものは9条であった(1980)。

削出突帯資料は突帯上下端が残存していなければ確認不可能であるため、資料的な制約もあるが、24例を確認した。第1～4群全群において確認されているが、第2・3群に占める比率が高い。突帯上面に直線紋を持たない第I種は数例確認できる程度で、大半が直線紋を伴う。突帯上面の直線紋条数については最高9条までを確認しているが(741)、資料の大半が少条の資料であった。

貼付突帯資料は単独施紋23例、複合施紋4例を

確認している。第1～4群の全群で確認できるが、6割強が第4群である。また、先にも述べたように、複合施紋がすべて第4群に集中する。いっぽうで頸口率の高いものについても認められるが(600・2051など)、頸口率0.80を超えるものは確認されていない。

複合施紋について補足しておく、貼付突帯と直線紋の関係は、通常少条(3条以下)の貼付突帯に多条の直線紋が組み合う例が多いが、貼付突帯の条数の方が多い例も確認している(644・突帯7+直線紋5)。

以上、小津浜遺跡出土広口壺の特徴を頸口率という観点から列挙してみた。口頸界の直線紋条数については、頸口率の高い資料については条数が少ないものでまとめ、頸口率が低くなるほど条数が増えていく、加えて条数にまとまりがなくなる、という傾向が確認できる。佐原の定義した3条以下の「少条」・4条以上の「多条」については、小津浜遺跡の場合、頸口率0.75前後、本稿で分類した第1・2群が両者の境界ラインにあることが想定できる。また、頸口率0.65以下になると、さらに条数は増加傾向を示し、最大では25条(3253)まで確認している。ただし、10条以上の資料については点数がさほど多くはなく、大半の資料が10条前後に留まっている点は注意する必要がある。

次節ではこれらの諸特徴が、はたして小津浜遺跡でのみ認められるのか否か、近畿地方の他遺跡についても同様の作業を行い、検討することとする。

(3) 他遺跡との比較検討

図2・3は近畿地方の各遺跡出土資料について、小津浜遺跡と同様の作業を行った結果をグラフにまとめたものである。近畿地方の各遺跡について、上記の視点から傾向を把握していくこととする。

①全体の傾向

最初に全体の傾向について概観しておきたい。

頸口率の高い一群でまとまっている遺跡は、大開遺跡・若江北遺跡・田井中遺跡・下鳥羽遺跡・湯ノ部遺跡などが挙げられる。これらのうち、若江北遺跡は資料のほぼすべてが第1群で占められる。この他の遺跡については第2群も確認できるが、大開・下鳥羽・湯ノ部の各遺跡では第1群の占める比率が

高い。田井中遺跡については、第1・2群の比率がほぼ半数で、直線紋条数は4条以下でまとまっている。

雲宮遺跡は第1～4群までが確認できるが、直線紋条数は6条以下にまとまっている状況が確認できる。

次に山賀・美園・唐古・鍵の各遺跡については、これらも第1～4群の資料を確認しているが、これらについては遺跡自体に時間幅が認められる。ただし、雲宮遺跡と異なる点として、第4群に10条以上の資料を持つ点が挙げられよう。これらの遺跡における直線紋と頸口率の相関関係については、小津浜遺跡で見たそれらの関係に酷似する。

最後に戎町遺跡であるが、この遺跡については第1群の資料は確認できず、第2～4群のみの資料で構成されている。特異な資料としては段に16条の直線紋が付随する資料が挙げられる(22)。

次に各遺跡の詳細についてみていこう。

②兵庫県

大開遺跡(前田ほか1993)は遺構の切り合いから、初期環濠段階と拡張環濠段階の2小時期の遺構・遺物が検出されているものの、遺跡全体として見た場合、弥生前期のなかでも前半代に位置付けられる資料群である。頸口率の最低値は0.69、最高値は0.89であったが、大半が頸口率0.75以上の第1群の資料であった。初期・拡張環濠段階を通じて広口壺の紋様は、段単純および削出突帯第I種、直線紋少条などが圧倒的多数を占め、貼付突帯あるいは直線紋多条資料は極めて少ない。また、口頸界の逆段は検出されていない。

戎町遺跡は、資料母数が少ないものの、河道などから前期後半に位置付けられる資料が出土している。頸口率は0.40～0.72だが、全体的に頸口率の値は低く、第3・4群の占める比率が高い。第4群の資料中には複合施紋(55)・広間隔直線紋(52・54)が認められる。

③大阪府

若江北遺跡(三好ほか1997)は、近畿地方では最古段階の遠賀川系土器が出土した遺跡で、大開遺跡と比較したとき、いくつかの相違点が存在する。簡単に触れておくと、大開遺跡の場合、口頸界・頸

胴界ともに単純な区分紋様(段・直線紋・削出突帯第Ⅰ種など)が施されているのに対し、若江北遺跡では、それらに加えて重弧紋・木葉紋などを頸部から胴部上半にかけて施すものが多い。頸口率は最高値で0.90、最低値で0.73であった。直線紋条数については、先ほど述べたように、繁縷なものを除けば、概ね3条以下に収まる。段・削出突帯ともに直線紋と組み合わせものは少ない(段単独・削出突帯第Ⅰ種)。また、大型品であるが貼付突帯も認められる(指捏貼付突帯)。

次に田井中遺跡についてみてみよう(岩瀬1996)。田井中遺跡では、出土資料の頸口率にやや広がりがあるが認められ、頸口率0.62～0.87の範囲内(第1～3群)に存在する。ただし、第3群の資料は僅少であることを考慮すると、ほぼ第1・2群で占められる、とあってよからう。ちなみに直線紋条数についても、ほぼ少条資料で占められ、先に見た第1・2群の特徴を逸脱するものではないことがわかる。

山賀遺跡では河川7の資料を中心に、他遺構出土の資料も取り上げた(村上ほか1991)。河川資料を含んでいるため、時期的にはばらつきが認められ、グラフ上の分布傾向は小津浜遺跡に類似したものとなった。頸口率は最高値が0.92、最低値が0.42となっている。各群の状況についても小津浜遺跡での想定にはほぼ適合する。出土量の最も多い河川7資料については第1～4群までの資料が含まれていたが、第3・4群については、直線紋条数に著しい多条化が認められず、特に第4群中において極端な多条化を指向する一群とは細分できる可能性が示唆される。

大阪府の事例として、最後に挙げるのは美園遺跡である(村上ほか1991)。美園遺跡では、BSK230・241・260などを比較資料として取り上げた。

BSK230では頸口率の高い資料が存在するが、この中には広口壺というよりもむしろ細頸壺と呼ぶべき資料も混在しており、様相としてはより中期に近い印象を与える。頸口率は0.45～0.86で、第1～4群のすべてが確認できるものの、全体の約半数が第3群であった。口頸界の直線紋条数は、3条から認められるものの、約2/3は多条(半数以上が6条以上)である。第4群については複合施紋・

広間隔直線紋は確認されていない。BSK260は頸口率0.44～0.58と、第3・4群の資料で占められる。口頸界紋様は、直線紋単独(多条)・削出突帯第Ⅱ種多条・貼付突帯であった。最後にBSK241であるが、頸口率は0.41～0.52とすべて第4群の資料からなり、より広口化が進行している状況が確認できる。口頸界紋様については直線紋単独と、貼付突帯資料で占められ、これらの条数についても7～9条であった。また、これらのうち、大型品が2個体確認されている。直線紋施紋資料に関しては広間隔に施紋されており、且つ条間には刺突紋を施している(1201・1204)。

④京都府

京都府からは下鳥羽遺跡(田畑1997)・雲宮遺跡(中川ほか1997)を取り上げておきたい。

下鳥羽遺跡では、二つの土坑(土壙161・163)で遠賀川系土器がまとまって出土している。これらの頸口率は0.70～0.87で、直線紋については少条資料のみである。この二つの土坑は土壙163→161の時間的組列が与えられているが、これを頸口率の関係からみていくとどうであろうか。

土壙163では頸口率0.70～0.81の範囲に分布するが、その大半が第1群に帰属する。いっぽうで土壙161は頸口率0.71～0.87とその分布の範囲は広がるが、半数弱が第2群に帰属する。土壙163・161の新古関係は紋様の消長によって決められているが、頸口率から見ても土壙161のほうが、より広口化が進んでいる資料が多いことがわかる。

雲宮遺跡は複数次に亘る調査が行われているが、ここでは(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの実施した調査結果を計測資料として使用した。

直線紋条数については少条資料が大半を占め、また、多条資料も極端な多条化を示す資料は認められない。頸口率は出土資料全体で0.49～0.92と、第1～4群までのすべてを含む。直線紋少条資料の頸口率は0.51～0.92と、その分布範囲は田井中遺跡などと比較すると広がりを示す(第2群が約6割を占める)。直線紋多条資料については頸口率0.86と高い値を示すものもあるが(133)、大型壺であることから一般的な傾向としては、直線紋少条資料と比べて全体的に頸口率は低い値を示す、とい

う点が指摘できる(頸口率 0.49 ~ 0.69、約 7 割が第 3・4 群)。

さて、今回使用した資料については遺構の切り合い、土器の型式学的検討などから、SX60 第 3 ~ 5 層 → 同第 1・2 層 → SX76 第 2・3 層 → 同第 1 層各出土土器、という型式組列が提示されている。これを頸口率からみてみると、SX60 第 3 ~ 5 層では頸口率 0.63 ~ 0.89 の範囲で分布し、それらの直線紋条数についてはすべて少条であった。SX60 第 1・2 層については、頸口率は 0.58 ~ 0.92(0.85 ~ 0.92 は大型壺)を示し直線紋条数については最高で 4 条の資料を見出す程度であった。SX76 第 2・3 層の特徴としては、さらに頸口率の幅が広がり(0.51 ~ 0.91、ただし 0.86・0.91 は大型壺)、直線紋多条資料が前段階と比較して安定的に出現する、という傾向が見出せる。最後に、これらのなかで最も新しい SX76 第 1 層の資料については、直線紋および貼付突帯の多条化、段資料の消失(逆段資料は残存)、などが特徴として挙げられよう。頸口率は 0.49 ~ 0.76 で、最低値はより低い値を示す。

⑤奈良県

奈良県の事例としては唐古・鍵遺跡出土資料を取り上げたい(寺沢 1981、藤田 1984 ~ 89)。これらの資料群については既に先行研究もあり、ここではそれらに従いながら頸口率の観点から特徴を抽出していくこととする⁽⁹⁾。

これまでの型式学的検討から(藤田、豆谷各 1998)、20 次 SK-215(大和第 I - 2 - a 様式) → 16 次 SX-102 黒粘Ⅲ・23 次落ち込みⅢ - 2・23 次 SK-153(同第 I - 2 - b 様式) → 16 次 SX-102 黒粘Ⅱ・23 次 SK-154(同第Ⅱ - 1 - a 様式) → 20 次 SK-212・33 次 SK-208(同第Ⅱ - 1 - b 様式)という型式組列が想定されているが、これについても頸口率の観点から見ていこう。

20 次 SK-215 は頸口率 0.47 ~ 0.87 の範囲に分布する。ただし、第 1・4 群に帰属する資料は少なく、大半が第 2・3 群の資料である。頸口率の高い資料はいずれも大型品であった。口頸界紋様は段・逆段・削出突帯・貼付突帯・直線紋単独、とすべての種類を網羅する。複合施紋例は見当たらない。直線紋多条の資料は確認されているものの、全体の 2

割に過ぎない。

次に 16 次 SX-102 黒粘Ⅲ・23 次落ち込みⅢ - 2・23 次 SK-153 だが、これらは頸口率 0.44 ~ 0.66 で、大半が第 3 群の範疇に収まる。直線紋条数については顕著な多条化を示す資料は確認されていない。落ち込みⅢ - 2 の資料については、条数は少ないものの、幅広の直線紋(広間隔直線紋)・削出突帯を持つものが認められる。

16 次 SX-102 黒粘Ⅱ・23 次 SK-154 については、資料数が少なく(2 個体)即断はできないが、いずれも直線紋条数が 10 条以上と多条化を示す。頸口率は 0.43、0.60 と第 3・4 群に帰属する。

20 次 SK-212・33 次 SK-208 は前期最末に位置付けられる資料。頸口率は SK-212 の場合 0.45 ~ 0.69、SK-208 は 0.54 のそれぞれに分布する。第 4 群の資料が主体となる。いずれの資料も多条化と無紋化に分化する傾向が看取できる。SK-208 では未計測資料ではあるが広間隔直線紋も出土している⁽⁹⁾。

⑥滋賀県

最後に滋賀県の事例として、小津浜遺跡の近郊に所在する湯ノ部遺跡(松室・伊庭 1997)・中島遺跡(岩崎・伊庭 2000)を取り上げておきたい。湯ノ部遺跡ではこれまでのところ、滋賀県下では最古級の遠賀川系土器が出土している。計測可能な資料について頸口率は 0.69 ~ 0.87 で第 1・2 群のみで構成される。口頸界の紋様には段・直線紋・無紋のほか貼付突帯も認められた(逆段は未検出)。条数については、全て 3 条以下の少条資料であった。

中島遺跡は小津浜遺跡と同じく守山市内に所在する。遠賀川系土器は SD-1 からの出土で、資料の内容は小津浜遺跡 SD-11 とほぼ同じ構成であった。頸口率 0.46 ~ 0.81 の資料が確認されているが、大半が第 3・4 群の資料で占められる。第 4 群資料については、極端な多条化を示す資料は出土していない。

5. 考察

(1) 各種紋様のありかた

本節では各種紋様(段(逆段)・削出突帯・貼付突帯)と頸口率との関係について、頸口率の変化に伴う各種紋様のありかたを検討する。また、無紋資

料についても触れることとする(図4参照)。

①段(逆段)

段資料は、全遺跡を総合すると頸口率0.51～0.89の範囲で確認している。このうち第1群に帰属するものが最も多く、第3・4群になると激減することがわかる。直線紋の伴わない段単独施紋資料は、第3・4群では全く認められない(頸口率0.65～0.89に分布)。いっぽう、逆段資料は頸口率0.53～0.73の範囲に分布する。段と異なる点としては、第1群の資料が全く確認できなかった点が挙げられる。第2・3群に盛行し、第4群で再び減少する傾向が認められる。

段資料であるが、その形態にはいくつかのバリエーションが認められる。口頸界については、①粘土帯接合面を利用した段(以下「接合面利用段」と呼称)・②割付用の沈線紋を巡らし、その片側を削り出すことによって成形される段(以下「削出段」と呼称)⁽¹⁰⁾の2種類が認められる。削出段はその施紋方法が、削出突帯の施紋方法と同一であることが指摘できる。小津浜遺跡資料のうち接合面利用段は、壺についてはほとんど認められていない(甕・鉢で数例認められる程度)。今回分析対象とした遺跡資料の中では、大開遺跡・若江北遺跡・湯ノ部遺跡などで確認されていることを考慮すると、接合面利用段は段資料のなかでも頸口率の高い一群にのみ採用される施紋方法であることがわかる。また、接合面利用段の大半が単独施紋されるのに対して、削出段の大半には直線紋が付随することも、削出段が削出突帯、あるいは頸胴界⁽¹¹⁾の段の影響下に成立したことを示唆するものであろう。

逆段資料について、小津浜遺跡を含む近畿地方の各遺跡資料を見渡しても口頸界において逆段が単独で存在する事例は非常に少なく⁽¹²⁾、ほとんどが直線紋を伴う。頸口率は直線紋を付随するものも含めて0.53～0.73の範囲に存在するが、いずれも削出手法に伴うものである。

逆段を通常の段と区分したのは形態上の相異だけでなく、それが本来は頸胴界紋様であったにもかかわらず、口頸界にコピーされていると考えたことによる。すなわち、(口頸界において)逆段は本来の段(区分紋様として)の意識を喪失した紋様であり、

その意味で通常の段に後出する、と考えられる。実際、逆段は単独で存在する事例がほとんど存在せず、大半の資料において直線紋と共存する。これは大半が単独で施される段との大きな相違点であり、また、逆の意味では、通常の段資料に直線紋が付随する事例は逆段+直線紋の影響下で出現したとも考えることが出来よう。以上の事から口頸界の逆段は、通常の段資料に後出する可能性が高く、またこのことは、逆段資料の中に粘土帯接合面を利用したものがないことから想定が可能であろう。

②削出突帯

削出突帯⁽¹³⁾については、頸口率0.49～0.92の範囲、第1～4群のすべてにおいて確認されている。数量的には第2群が最も多く、第3・4群になると減少していく状況が確認できる。前項の段資料でも見たように、目安の割付用沈線紋の上下をそれぞれ削りだして成形したものが大半となる。突帯上面に直線紋を有さない第I種については、頸口率0.58～0.90の範囲に分布する。第1～3群までに相当するが、そのなかでも第1群が約48%を占め、以下第2群(38%)、3群(14%)とその数は減少していく。また、突帯上面に直線紋を有する第II種⁽¹⁴⁾については、少条が約54%を占め、多条資料よりやや多い。多条資料については、6条までの資料が大半を占め、10条を超えるような資料は僅少であった。このようなことから、削出突帯は口縁部の広口化が進行する過程で極端な多条化を受け入れず、徐々に消失していったと想定できる。

③貼付突帯

口頸界における貼付突帯は、1条から11条まで確認している。頸口率は0.40～0.95と広範囲に存在する。第1群から第4群へと増加傾向にあり、第4群が最も数量的に多い。突帯上には刻目・押圧⁽¹⁵⁾を施すものが多い。刻目は刻目凸帯紋土器と比較して、全体的に小振りなものが多い点が指摘できる。押圧については指頭によるものと想定される他に、布巻棒による押圧(布巻棒圧痕)も確認している。

複数条の突帯を貼付する場合、1条ずつ分離して貼付する場合(分割貼付法)と、幅広の粘土帯を貼付した後にナデによって突帯を形成する(複条貼付法)⁽¹⁶⁾、という二つの手法を確認している。複条貼付

法の資料は小津浜遺跡をはじめ、数量的には多くなく、必ずしも普遍的なものではないようだ。

また、突帯が剥離した資料を観察すると、貼付位置に目印の沈線紋を巡らせている事例が確認できる。貼付突帯と直線紋が同一箇所⁽⁷⁾に施されている複合施紋は、目印の沈線紋のみで突帯を貼付することをやめ、上端あるいは下端にのみ突帯が残存したものと捉えることができる。また、これらはすべて第4群に帰属する資料であることにも注意が必要だろう。

④無紋

無紋資料は頸口率 0.45 ~ 0.91 の範囲に分布する。頸口率との関係を述べると、第1群に集中し、第2~4群については、その資料数は著しく減少する。広口細頸化という流れのなかで、全体の傾向として口頸界・頸胴界には各種紋様を施し、「飾る壺」へと変化していくが、無紋資料についてはその大半が頸胴界についても飾らない。無紋資料のうち、頸胴界も判明している資料を見ると、頸胴率は 0.38 ~ 0.77 で、頸胴率 0.5 以上のいわゆる細頸化が顕著でない(=胴部の張りが顕著でない)資料が約 52% を占め、胴部の著しく張った資料(頸胴率 0.4 以下)を凌駕する⁽⁷⁾。このようなことから、無紋資料は加飾度を強めていく(胴部の張りは強い)第2~4群の中で、徐々にその数を減らしていくものと考えられる。

(2)紋様の簡略化傾向

本節では広口化が進行していく過程で確認される、紋様の簡略化傾向についてみていくこととする。

①複合施紋

複合施紋については前節第3項でも述べたが、これらはいずれも第4群に帰属する。広口化が進行した資料では必然的に頸部が長くなり、その過程で 10 ~ 20 条近くの突帯を貼付し、紋様帯を構成する手間を考えれば、施紋の簡略化という観点から複合施紋が導入された⁽⁸⁾と考えるのが妥当だろう。

②広間隔直線紋

直線紋単独施紋資料のなかには、他資料よりも直線紋の間隔が広いものを散見する。これについては、戎町遺跡・美園遺跡・小津浜遺跡などの第4群資料で確認することができる⁽⁸⁾。いずれも口頸界から頸胴界にかけて少ない条数で器面の大半を加飾するとい

う、本来の加飾の意図を喪失した紋様とも言える。10 ~ 20 条という多条直線紋を間隔の広い直線紋で済ます、という発想から広間隔直線紋は多条(帯状)直線紋よりも後出のものと考えられる。

6. まとめと今後の課題

(1)広口細頸化のプロセス

以上、遠賀川系の広口壺について細頸化のプロセスについて検討を行ってきた。検討の結果をまとめておくと、広口細頸化の過程において直線紋条数は、基本的には増加傾向にあるが、頸口率の低い資料は高い資料に比べ、条数の選択に幅があり、「少条」「多条」の区分は必ずしも厳然としたものでなく、漸次的であることが明らかとなった。また、口頸界に施紋される各種紋様については各群ごとにおいて、受け入れ方に差異があることも具体的に示すことができた。

区分紋様から帯状紋様への変化をどの段階とするかについては、条数の増加がそれまでよりも著しくなる第3群とするのが妥当と思われる。

最後に、今回行った、直線紋条数と頸口率との関係から導き出した4群をまとめておきたい。

第1群…頸口率 0.75 以上。直線紋は概ね 3 条以下でほぼ固定している。段・無紋資料の占める割合が高い。貼付突帯もわずかに認められる。大型品の占める割合が高い。

第2群…頸口率 0.65 ~ 0.75。直線紋は 4 条までのものが多い。削出突帯・逆段が盛行する。無紋資料の激減。

第3群…頸口率 0.55 ~ 0.65。直線紋の多条化が一気に進行する。区分紋様としての段はこの段階でほぼ消失。

第4群…広口細頸化が最も顕著になる。極端な多条化を指向し、いっぽうで複合施紋・広間隔直線紋など紋様の簡略化傾向も顕著になる。第1群以外では本群で大型品が数量的に認められる。

これら4群については、広口化の観点からは第1~4群への型式学的組列が考えられるが、個々の要素を見ていくとこれらは厳然と区分できるものではなく、時間的組列を考える際には、さらに細分・検

討が必要なというまでもなからう。

(2) 今後の課題

本稿では、遠賀川系壺の広口化にのみ焦点を絞ったため、これまでに行なった考察の運用についてまではふれることができなかつた。具体的には全体のプロポーシオンにまで話が及ばず、中途半端の観が強い。編年という問題にも立ち入る必要があつたのだが、今回はその前段階として遠賀川系広口壺を広口細頸化・口頸界直線紋の条数という視点で見た場合、大きく4群に分類することが可能であることを

示した。しかしながら、これらの各群が必ずしも時間的組列を示しているか、という問題になると、大筋では認められるが、細部にまで注意を払うとそうでない事例が認められるのも事実である。また、今回は広口壺のみ扱い、前期末になると組成に加わる細頸・短頸の各壺などについては全く触れることができなかつた⁽¹⁰⁾。また、広口化に伴う壺用蓋の消失、という問題についても改めて考えてみる必要があろう。これらの問題については次稿以降の課題とした。

註

- (1) 研究史に準拠すれば「篋描沈線紋」と呼称するのが正しいが、沈線紋は櫛描紋・凹線紋などとともに、施紋方法についての概念と考える。筆者の規定する沈線紋の定義は、何らかの工具によって1本ずつ施紋され、且つ施紋後未調整のもの、と限定する。
- (2) 篋描沈線紋から櫛描紋への移行に関して、これまでの直線紋条数の増加に伴う施紋の手間の省略という観点で説明されてきたのに対して、伊勢湾沿岸地域の条痕紋にその祖形を想定する、といった意見もあり(若林1992)、篋描沈線紋から櫛描紋への移行については、今後慎重な検討を行う必要があろう。
- (3) 1999・2000年度に整理作業に従事。2002年3月報告書刊行(伊庭ほか2002)。以下、土器番号はすべて報告書に準拠しているので参照されたい(他遺跡についても同様)。
- (4) 小津浜遺跡の近隣では草津市烏丸崎遺跡・守山市中島遺跡・同服部遺跡・中主町湯ノ部遺跡などで、まとまった数量の遠賀川系土器が出土しているが、本稿では現時点で資料が公表されている湯ノ部遺跡・中島遺跡のみを取り上げることとする。中島遺跡出土資料を用いての直線紋条数と頸口率の相関関係グラフについては、資料母数が少ないため割愛した。
- (5) 京都府は下鳥羽遺跡・雲宮遺跡、大阪府は若江北遺跡・山賀遺跡・美園遺跡、奈良県は唐古・鍵遺跡、兵庫県は大開遺跡・戎町遺跡、の資料を分析資料として用いた。
- (6) 貼付突帯には1条ずつ貼付したものと、幅広の粘土帯を貼付し成形段階で複数条に分ける複条貼付法によるものの2種が確認されている。特に問題となるのは複条貼付突帯であるが、本稿では可視的に何条見えるか、という観点から複条貼付突帯を1条としてはカウントしていない。
- (7) 本資料については、伊庭 功も言及している(伊庭1996)。
- (8) 本資料は、削出段の上部に3条の直線紋、さらにその上部に2条の貼付突帯が付随する。
- (9) 各遺構(出土土器)の型式学的組列については藤田・松本1989、藤 H1998、豆谷1998などに従った。
- (10) 削出段の削出手法とは、基本的に井藤暁子によるC手法だが(井藤1983)、観察による限りでは、①割付用の直線紋の片側をタテハケで掻き取り、②その低めた部分をヨコナデ、あるいはヨコミガキで整える方法が通有のようである。ただし最終調整のナデなりミガキが丁寧に施されている場合、前処理のハケメについては確認できない場合も多い。
- (11) 全遺跡を総合して計算すると、段資料のうち単独施紋は約72%を占める。段単独施紋の場合、頸口率は0.65~0.89の範囲で、そのうち約65%が第1群に帰属する。段に直線紋を伴う場合、頸口率は0.51~0.86とその範囲は広がり、また第1群の占める比率も低くなる(約41%)。
- (12) 雲宮遺跡、唐古・鍵遺跡でそれぞれ確認している。
- (13) 削出突帯については、突帯の上下端が残存していない限り認識できないので、本来はさらに数が増すものと考えられる。今回は突帯の上下端が残存しているものに限り、削出突帯と認定した。
- (14) 多条資料は全体の約12%、突帯上面に直線紋を有しない第1種は約34%であった。
- (15) 刻目と押圧の区別については、「刻目」が内面の屈出点が明瞭であるのに対し、「押圧」は内面の屈曲点がなく緩やかにカーブするもの、という意味で使用している。ただし、両者の施紋原体が厳密に別物である、という証明はできず、ここでは、大きく刻目という枠に収まる両者の、施紋形態の差異を示す意味で使用することとする。
- (16) 小津浜遺跡での観察結果による。
- (17) 豆谷1995では、広口壺について「飾る壺」と「飾らない壺」に分別し、飾る壺については、胴の張りが強いことを指摘している。
- (18) 小津浜遺跡1196・2078・2079、戎町遺跡52・54(1次調査河道上層)、美園1201・1204(BSK241)など。小津浜2079については各条線が二叉状工具によって施紋されている。

(9) 細頸・短頸壺の頸口率を算出すると、いずれも数値は0.80～0.90に近い数値となり、第1群に含まれる。しかしながらこれらの器種は、直線紋・貼付突帯多条資料である場合が多く、紋様構成から見ると、明らかに第4群に近い様相を呈する。本稿では広口壺における頸口率の変化に伴う直線紋条数の増加、という現象にスポットを当てているため、あえて考察の対象から除外した。これらについては頸口率という観点からではなく、別のアプローチが必要だろう。

引用・参考文献

秋山浩三 「弥生前期土器 ―遠賀川式土器の地域色と吉備―」『吉備の考古学的研究』(上) 近藤義郎編 山陽新聞社、1992

石神幸子ほか 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』(財)大阪文化財センター、1991

井藤暁子 「近畿」(佐原 真編『弥生土器』Ⅰ ニュー・サイエンス社、1983

伊庭 功 「小津浜遺跡から出土した特異な弥生土器について」『滋賀考古』第15号 滋賀考古学研究会、1996

伊庭 功ほか 『小津浜遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、2002

岩崎 茂・伊庭 功 『中島遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会、2000

岩瀬 透 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会、1996

國分政子 「弥生土器地域論 ―畿内第Ⅱ様式の系譜をめぐって―」『滋賀考古』第2号 滋賀考古学研究会、1989

佐原 真 「山城における弥生式文化の成立 ―畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置―」『史林』第50巻第5号 史学研究会、1967

田畑直彦 「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集』1、1997

寺沢 薫 『昭和55年度唐古・鍵遺跡第10・11次発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所、1981

中川和哉ほか 『雲宮遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1997

藤田三郎 『昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報・黒田大塚古墳第1次発掘調査概報』田

原本町教育委員会、1984

藤田三郎 『昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報・黒田大塚古墳第2次発掘調査概報』田原本町教育委員会、1985

藤田三郎 『昭和61年度唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』田原本町教育委員会、1987

藤田三郎 『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』田原本町教育委員会、1988

藤田三郎 『昭和62・63年度唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報』田原本町教育委員会、1989

藤田三郎・松本洋明 「大和地域」(寺沢・森岡編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、1989

藤田三郎 「大和第Ⅱ様式の土器」『みずほ』第25号 大和弥生文化の会、1998

前田佳久ほか 『神戸市兵庫区 大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社、1993

松本洋明 「弥生土器・考察Ⅰ―水壺の出現―」『みずほ』第7号 大和弥生文化の会、1993

松本洋明 「弥生土器・考察Ⅱ―水壺の出現(後編)―」『みずほ』第8号 大和弥生文化の会、1993

松室孝樹・伊庭 功 『湯ノ部遺跡Ⅳ・西河原宮ノ内遺跡Ⅰ』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(V) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、1997

豆谷和之 「前期弥生土器出現」『古代』第99号 早稲田大学考古学会、1995

豆谷和之 「大和第Ⅱ―Ⅰ様式とその背景」『みずほ』第25号 大和弥生文化の会、1998

三好孝一ほか 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書―第5次―』(財)大阪府文化財調査研究センター、1997

山本雅和ほか 『神戸市須磨区 戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会、1989

若林邦彦 「弥生土器櫛描文様に関する覚書―その発生をどのように考えればよいのか―」『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 (財)大阪文化財センター、1992

若林邦彦 「遠賀川系土器様式の終焉 ―近畿とその隣接地域を中心として―」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会、1999

若林邦彦 「河内潟沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『弥生文化の成立 ―各地域における弥生文化成立期の具体像―』埋蔵文化財研究会、2000

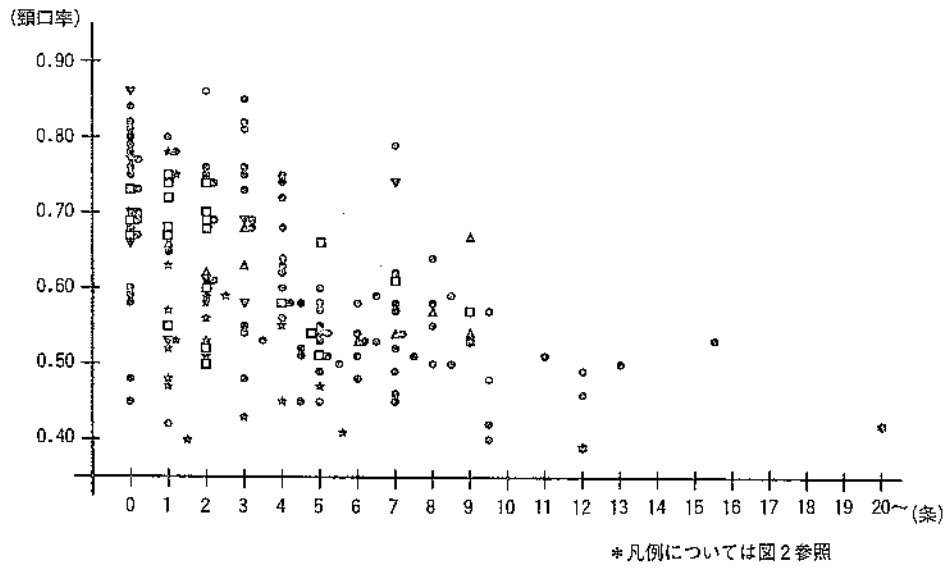


図1 小津浜遺跡出土遠賀川系広口壺の頸口率・口頸界直線紋条数の関係

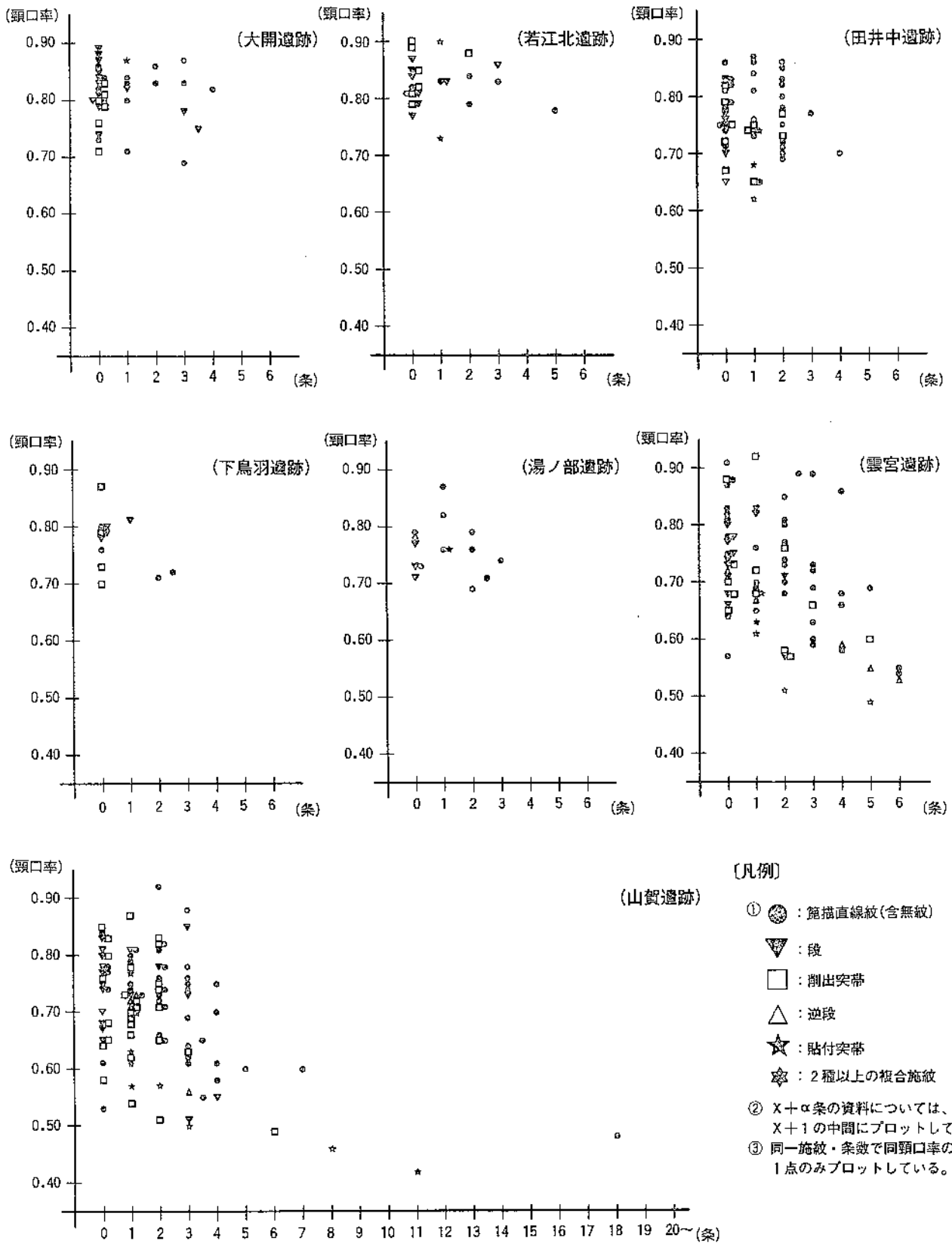


図2 近畿各遺跡出土遠賀川系広口壺の頸口率・口頸界沈線紋条数の関係(1)

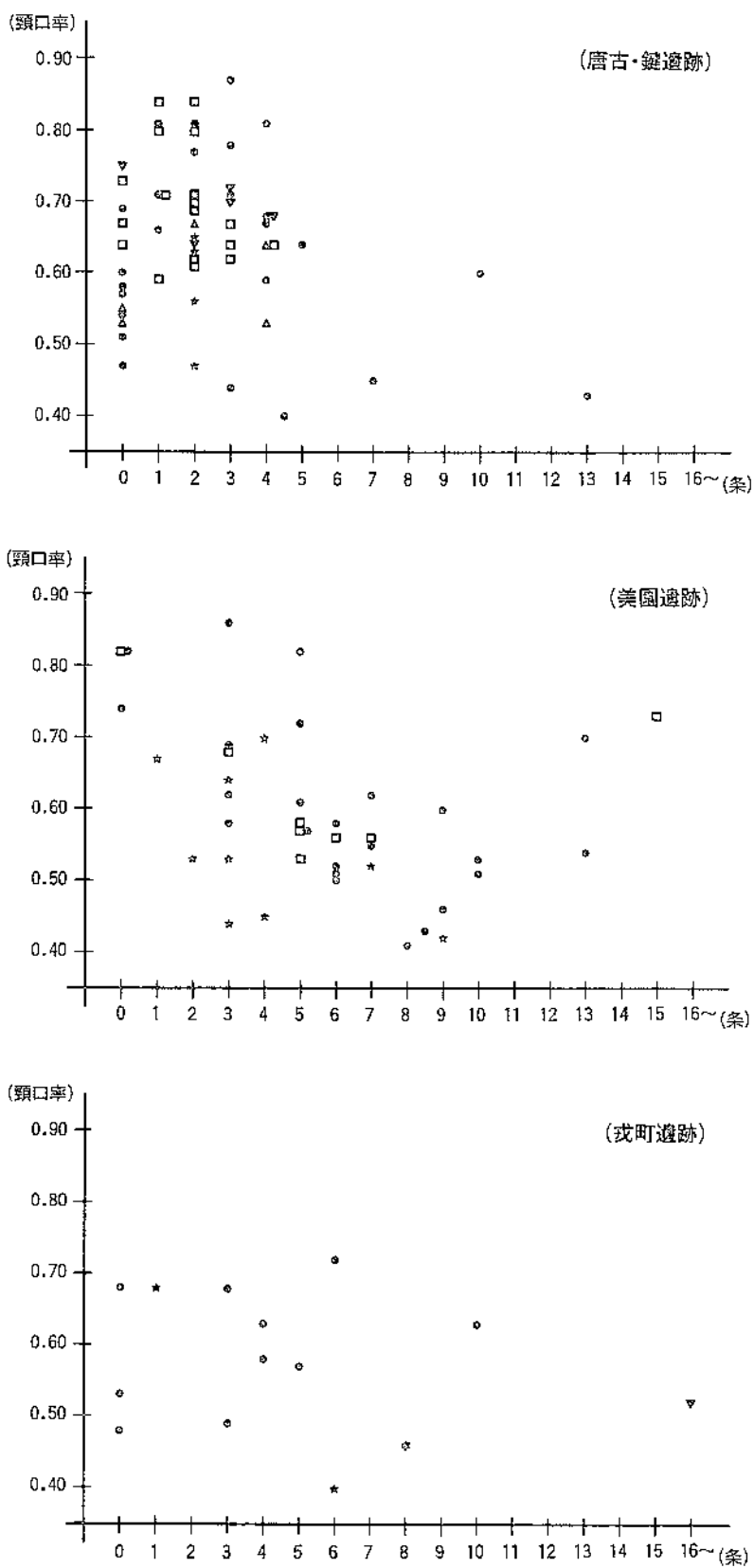


図3 近畿各遺跡出土遠賀川系広口壺の頸口率・口頸界沈線紋条数の関係 (2)

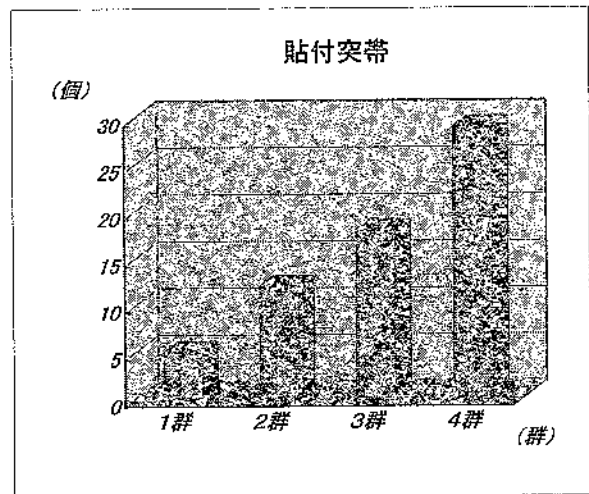
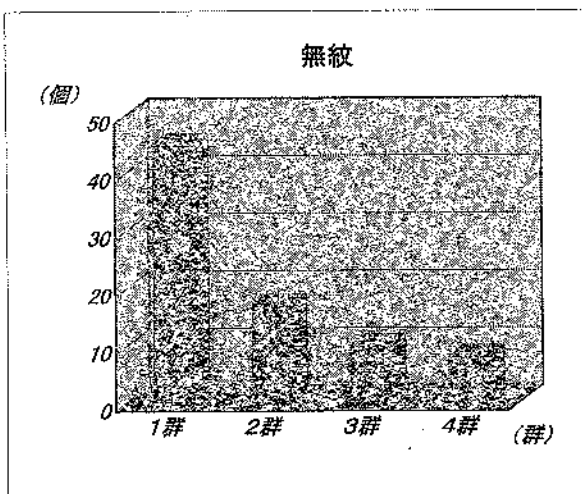
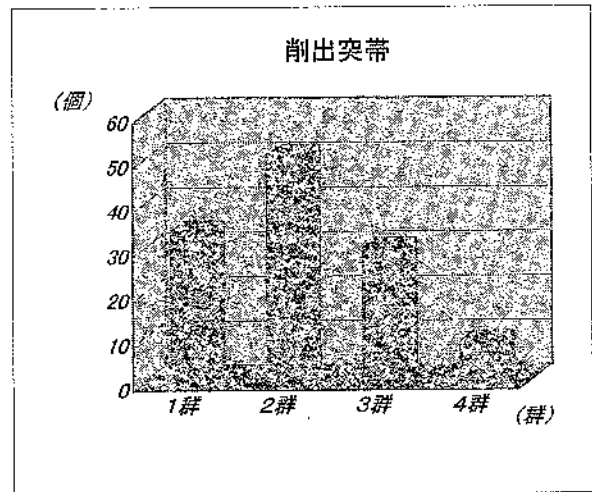
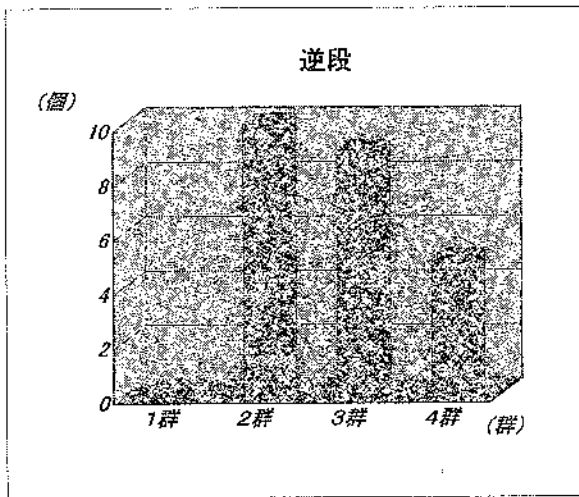
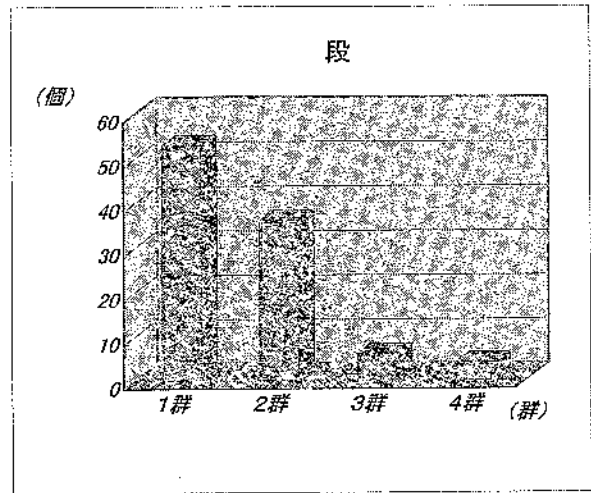
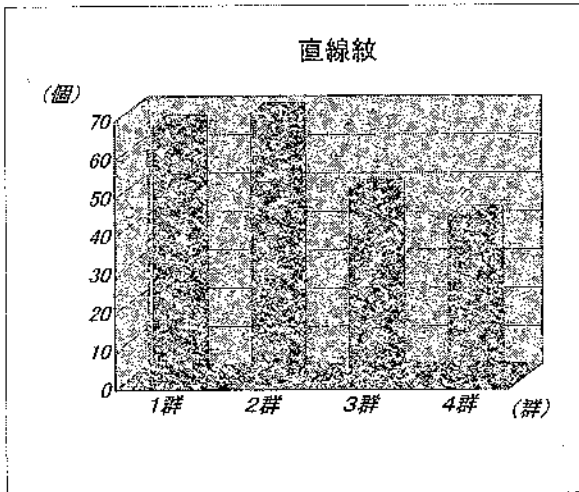


図4 各施紋の各群内における数量 (全遺跡総合)

資料番号	出土地点	口頸異紋様	口頸異直線紋条数	頸間異紋様	頸間異直線紋条数	頸口率	頸間率	胴高率
番号								
395	SX60第1層	B	1			0.92		
307	SX76第3層	A	0			0.91		
543	SX60第3層	A	3			0.89		
546	SX60第3層	A	3+ a_1			0.89		
545	SX60第3層	B	0			0.88		
394	SX60第1層	A	0			0.88		
397	SX60第1層	A	0			0.87		
133	SX76第2層	A	4	A	0	0.86		
388	SX60第1層	A	2	A	2	0.85	0.72	
94	SX76第2層	C	1			0.83		
134	SX76第2層	A	0	A	0	0.83	0.77	
305	SX76第3層	C	1			0.82		
102	SX76第2層	A	0			0.82		
552	SX60第1層	A	2			0.81		
531	SX60第3層	A	0			0.81		
537	SX60第3層	C	0			0.80		
481	SX60第2層	A	2			0.80		
589	SX60第4層	A	2			0.80		
553	SX60第3層	A	0	D	0	0.78		
578	SX60第4層	C	0	A	2+ a_1	0.78		
390	SX60第1層	A	2	A	4+ a_1	0.77		
540	SX60第3層	C	0			0.77		
19	SX76第1層	B	2	A	0	0.76		
586	SX60第4層	A	1			0.76		
14	SX76第1層	A	0	A	0	0.75	0.49	0.82
478	SX60第2層	C	0			0.75		
588	SX60第4層	A	2			0.74		
367	SX60第1層	C	0			0.74		
488	SX60第2層	A	2			0.74		
480	SX60第2層	A	2			0.74		
385	SX60第1層	A	3	A	3	0.73	0.53	0.87
92	SX76第2層	C	0			0.73		
627	SX60第5層	B	0			0.73		
374	SX60第1層	A	3			0.73		
371	SX60第1層	A	2			0.73		
109	SX76第2層	B	1			0.72		
20	SX76第1層	A	3	A	3	0.72	0.45	
581	SX60第4層	D	0			0.72		
366	SX60第1層	C	0			0.71		
549	SX60第3層	C	2			0.71		
587	SX60第4層	A	1			0.70		
494	SX60第2層	A	2	D	4	0.70	0.47	
376	SX60第1層	B	0			0.70		
579	SX60第1層	A	3	A	0	0.69	0.55	0.91
479	SX60第2層	A	1			0.69		
373	SX60第1層	A	3			0.69		
6	SX76第1層	A	5			0.69		
480	SX60第2層	E	1			0.68		
387	SX60第1層	A	2			0.68		
539	SX60第3層	C	0			0.68		
107	SX76第2層	A	2			0.68		
529	SX60第3層	B	0	D	0	0.68		
536	SX60第3層	C	0			0.68		
16	SX76第1層	B	1	B	1	0.68		
590	SX60第4層	D	1			0.67		
486	SX60第2層	A	4			0.66		
535	SX60第3層	C	0			0.66		
495	SX60第3層	C	0	D	3	0.66	0.40	
116	SX76第2層	B	3			0.66		
124	SX76第2層	A	1	D	2	0.65	0.46	0.93
10	SX76第1層	B	0			0.65		
389	SX60第1層	A	0	D	3	0.64		
542	SX60第3層	A	3			0.63		
195	SX60第2層	E	1			0.63		
126	SX76第2層	E	1	E	1	0.61	0.34	
2	SX76第1層	A	3			0.60		
105	SX76第2層	B	5			0.60		
37	SX76第1層	D	4	A	7-1	0.59	0.47	0.93
125	SX76第2層	A	3	A	5	0.59	0.40	
372	SX60第1層	A	4			0.58		
291	SX76第3層	B	2			0.58		
101	SX76第2層	C	2			0.57		
123	SX76第2層	A	0	A	0	0.57	0.46	
109	SX76第2層	B	2			0.57		
5	SX76第1層	B	5			0.55		
121	SX76第2層	A	6			0.55		
293	SX76第3層	A	6			0.54		
108	SX76第2層	D	6			0.53		
122	SX76第2層	E	2	B	1+ a_1	0.51		
15	SX76第1層	E	5			0.49		
127	SX76第2層	E	2	A	7		0.36	
番号/層								
39	20/SK-215	A	3			0.87		
40	20/SK-215	B	1			0.84		
37	20/SK-215	B	1			0.84		
36	20/SK-215	B	3			0.84		
2	11/SK-19	A	1	A	3	0.81		

資料番号	出土地点	口頸異紋様	口頸異直線紋条数	頸間異紋様	頸間異直線紋条数	頸口率	頸間率	胴高率
25	20/SK-215	A	2	A	3	0.81	0.44	0.87
38	20/SK-215	A	4			0.8		
35	20/SK-215	B	2			0.80		
9	26/SD-1201	B	1			0.80		
26	20/SK-215	A	3			0.79		
41	20/SK-215	A	2			0.77	0.53	0.85
1	20/SK-215	C	0			0.75		
3	20/SK-215	B	0			0.73		
7	20/SK-215	C	3			0.72		
22	20/SK-215	A	1	A	2	0.71		
11	20/SK-215	B	3			0.71		
1	11/SK-17	A	3	B	3	0.71	0.37	0.96
15	20/SK-215	E	1			0.71		
17	20/SK-215	B	2			0.70		
9	20/SK-215	C	3			0.70		
3	20/SK-212	A	0			0.69		
20	20/SK-215	B	2	E	1	0.69	0.40	
9	20/SK-215	C	4			0.66		
31	20/SK-215	A	4	AE	6-1	0.68	0.41	
13	20/SK-215	B	3			0.67		
10	20/SK-215	B	0			0.67		
23	20/SK-215	A	4	A	5	0.67	0.39	1.00
6	20/SK-215	D	2			0.67		
1	23/SK-153	A	1	A	1	0.66	0.49	0.83
39	20/SK-215	E	2	DV	2	0.65		
12	20/SK-215	B	4			0.64		
18	16/SK-102 ¹⁾	D	4	A	0	0.64	0.45	0.84
4	20/SK-215	D	0	C	3	0.64		
5	20/SK-215	B	3	D	4	0.64	0.42	
1	26/SD-1201	C	2			0.64		
27	20/SK-215	A	5			0.64		
29	20/SK-215	E	2	E	1+ a_1	0.63		
18	20/SK-215	B	3	B	4	0.62	0.35	0.90
14	20/SK-215	B	2			0.62		
19	20/SK-215	B	2	B	2	0.61		
9	16/SK-102 ²⁾	A	10	A	0	0.60	0.36	
4	20/SK-212	A	0			0.60		
28	20/SK-215	A	4			0.59		
16	20/SK-215	B	1			0.59		
2	落ち込みⅢ-2	B	1	A	0	0.59	0.44	0.84
3	23/SK-153	A	0	A	0	0.58	0.38	0.93
1	11/SK-35	A	0	A	0	0.57	0.49	0.70
34	20/SK-215	E	2	AM	5+ a_1	0.66	0.34	1.05
2	20/SK-215	D	0	B	3	0.55	0.46	
10	33/SK-208	A	0			0.54		
2	26/SD-1201	D	4			0.53		
6	20/SK-212	A	0	A	0	0.51	0.51	
32	20/SK-215	E	2			0.47		
2	20/SK-212	A	0			0.47		
1	20/SK-212	A	7			0.45		
1	落ち込みⅢ-2	A	3	A	2	0.44	0.45	0.71
17	23/SK-154	A	13	A	0	0.43	0.44	0.70
5	33/SK-208	A	11	A	12	0.40		
24	20/SK-215	A	4+ a_1	A	4		0.40	
番号/層								
123-12	土坑15	E	1			0.90		
111-15	溝25	B	0			0.90		
112-1	溝25	B	0	D	0	0.89	0.63	0.97
105-5	溝24	B	2	D	1	0.88	0.60	
125-4	土坑20	C	0	D	0	0.87	0.56	
119-7	土坑14	C	3	A	3	0.86	0.53	
107-15	溝25	C	0	D	0	0.85	0.57	
107-8	溝25	C	0			0.85		
120-6	土坑14	B	0	D	0	0.85	0.53	
107-10	溝25	C	0	D	0	0.84	0.54	
111-13	溝25	A	2	D	1	0.84	0.44	
119-11	土坑14	A	3	D	0	0.83		
119-5	土坑14	C	1	A	3	0.83		
120-5	土坑14	C	1			0.83		
119-12	土坑14	A	1	D	2	0.83	0.40	0.95
108-6	溝25	B	0	A	2	0.82	0.44	
111-9	溝25	A	0			0.82		
111-12	溝25	B	0	D	0	0.81	0.57	
119-3	土坑14	C	0	A	5	0.81	0.55	
108-13	溝25	A	0	A	2	0.81	0.51	0.91
199-3	溝25	B	0	A	2	0.79	0.48	
107-9	溝25	C	0			0.79		
111-10	溝25	A	2			0.79		
109-2	溝25	A	5			0.76	0.49	
107-7	溝25	C	0			0.77		
111-11	溝25	E	1	D	0	0.73	0.54	0.78
番号/層								
144	溝405-2上層	A	1	D	0	0.87		
312	溝411中層	A	2	A	2	0.86		
178	溝405-1中層	A	0	B	1	0.86		
349	溝411中層	A	1			0.86		
196	溝405-1下層	A	2			0.85	0.65	0.79
67	溝406	A	1			0.84		

表1 各遺跡出土広口壺計測データ(1)

資料番号	出土地点	口頸異様	口頸異様直線紋条数	頸肩異様	頸肩異様直線紋条数	頸口率	頸肩率	胴高率
180	溝405-1下層	C	0			0.83		
372	土坑408	A	2			0.83		
381	谷状地形	A	0	A	1	0.83	0.51	0.84
137	溝405-2上層	A	0			0.83		
353	溝411中層	A	2			0.82		
328	溝411中層	A	0			0.82		
66	溝406	A	0	A	0	0.82		
79	溝406	B	0			0.82		
139	溝405-2上層	A	0			0.81		
311	溝411中層	A	1	B	0	0.81	0.48	1.02
146	溝405-2中層	A	2			0.80		
179	溝405-1上層	A	0			0.79		
370	土坑408	B	0	B	0	0.79	0.43	0.96
101	溝404	A	0			0.78		
355	溝411中層	A	2			0.78		
136	溝405-2中層	A	0			0.78		
198	溝405-1中層	A	3			0.77		
3	溝401	C	0			0.77		
103	溝404	B	2			0.77		
107	溝404	A	1			0.76		
371	土坑408	C	0			0.76		
177	溝405-1中層	A	0	D	0	0.75	0.48	0.95
351	溝411下層	B	1			0.75		
352	溝411下層	A	2			0.75		
72	溝406	B	0			0.75		
359	溝411中層	C	0			0.75		
2	溝401	A	0	A	3	0.74	0.49	
184	溝405-1下層	B	1			0.74		
73	溝406中層	E	1	D	2	0.74		
310	溝411中層	A	1	D	0	0.74	0.43	0.94
145	溝405-2中層	A	1			0.73		
141	溝405-2中層	B	2			0.73		
74	溝406	A	2			0.72		
195	溝405-1上層	A	2			0.72		
140	溝405-2中層	B	0			0.72		
181	溝405-1中層	C	0	A	4	0.71	0.48	0.92
197	溝405-1下層	A	2	D	1	0.71	0.50	
147	溝405-2上層	A	4			0.70		
162	溝404	C	0			0.70		
148	溝405-2上層	A	2			0.70		
356	溝411中層	A	2			0.69		
142	溝405-2上層	E	1			0.68		
183	溝405-1中層	B	0			0.67		
71	溝406	B	1			0.65		
198	溝405-2上層	C	0			0.65		
143	溝405-2中層	A	1	D	2	0.65	0.29	1.18
106	溝404	E	1			0.62		
105	溝404	D	4	D	3		0.33	
山賀(3)								
441	河川7	A	2			0.92		
400	河川7	A	3			0.88		
445	河川7	B	1			0.87		
442	河川7	B	0			0.85		
446	河川7	C	3			0.85		
435	河川7	A	0			0.84		
444	河川7	B	2	B	2	0.83		
280	土坑10	C	0	A	0	0.83	0.57	
443	河川7	B	0			0.83		
206	土器群	B	2			0.82		
208	土器群	A	2			0.82		
397	河川7	A	2			0.81		
351	河川7	C	0	A	0	0.81	0.49	1.00
352	河川7	C	1			0.81		
368	河川7	B	0			0.81		
360	河川7	A	1	D	1	0.80	0.53	0.96
350	河川7	C	0			0.80		
396	河川7	A	1			0.79		
394	河川7	A	2	A	2	0.78	0.43	0.99
390	河川7	A	2			0.78		
803	包含層	C	2			0.78	0.50	0.85
381	河川7	B	1			0.78		
401	河川7	A	3			0.78		
434	河川7	A	0			0.78		
349	河川7	C	0			0.78		
345	河川7	C	0			0.77		
218	土器群	E	1	E	1	0.77		
214	土器群	A	0			0.77		
367	河川7	B	0			0.76		
427	河川7	A	2			0.76	0.62	
398	河川7	A	2			0.76		
406	河川7	A	3	D	3	0.76		
212	土器群	A	4			0.75		
205	土器群	B	2			0.75		
405	河川7	A	4			0.75		
389	河川7	A	1	A	2+a	0.75		
358	河川7	C	0	D	3	0.75	0.45	0.90
364	河川7	A	3	D	2	0.75	0.48	
402	河川7	A	3			0.75		

資料番号	出土地点	口頸異様	口頸異様直線紋条数	頸肩異様	頸肩異様直線紋条数	頸口率	頸肩率	胴高率
346	河川7	C	0			0.74		
409	河川7	A	3	A	0	0.74	0.45	0.88
387	河川7	D	2	A	3	0.74	0.48	0.89
344	河川7	C	0			0.74		
361	河川7	A	1	B	0	0.74	0.49	0.87
213	土器群	A	0			0.74		
407	河川7	A	2	A	2	0.74	0.54	0.63
353	河川7	C	1			0.73		
378	河川7	B	1			0.73		
355	河川7	D	1			0.73		
354	河川7	C	3			0.73		
207	土器群	A	1			0.73		
362	河川7	A	2	D	2	0.73		
356	河川7	D	1			0.72		
380	河川7	B	1			0.72		
209	土器群	A	2			0.72		
286	土坑11	D	1	D	1	0.72	0.45	0.92
377	河川7	B	1			0.72		
411	河川7	A	2	A	3	0.71	0.41	0.93
357	河川7	D	1			0.71		
381	河川7	A	2			0.71		
204	土器群	B	1			0.71		
376	河川7	B	1			0.70		
424	河川7	E	1			0.70		
201	土器群	C	0			0.70		
211	土器群	A	4			0.70		
369	河川7	C	0	D	2	0.70	0.42	0.86
422	河川7	E	1	B	3	0.70		
374	河川7	B	1			0.69		
399	河川7	A	3			0.69		
210	土器群	A	3			0.69		
733	溝42	A	3			0.69	0.33	
279	土坑10	B	1			0.68		
372	河川7	B	0			0.68		
348	河川7	C	0			0.68		
202	土器群	C	0			0.67		
395	河川7	A	2			0.66		
379	河川7	B	1			0.66		
370	河川7	B	0			0.65		
198	第1段の底土上層	B	2	D	2	0.65	0.40	1.07
404	河川7	A	3+a			0.65		
410	河川7	A	2	A	2	0.65	0.53	0.98
347	河川7	C	0			0.65		
766	包含層	A	3			0.64	0.42	
395	河川7	B	0	H	0	0.64	0.35	0.99
382	河川7	B	3			0.63		
369	河川7	B	0			0.63		
426	河川7	E	1			0.63		
428	河川7	E	2+a			0.62		
375	河川7	D	1			0.62		
413	河川7	A	3	A	4	0.61	0.41	1.02
425	河川7	E	1			0.61		
468	河川7	A	4	A	5+2	0.61	0.40	
436	河川7	A	0	A	0	0.61	0.47	0.89
420	河川7	A	7	A	5	0.60	0.42	0.87
421	河川7	A	5	B	4	0.60	0.37	0.87
E08	包含層	A	4			0.58	0.55	
371	河川7	B	0			0.58		
806	包含層	E	1			0.57	0.47	
427	河川7	E	2	A	4+4	0.57	0.47	0.79
412	河川7	D	3	B	2	0.56	0.44	0.91
388	河川7	C	4	B	3	0.55	0.38	0.84
403	河川7	A	3+a			0.55		
719	溝41	B	1			0.54	0.40	
807	包含層	A	0			0.53	0.51	0.71
393	河川7	C	3	B	3	0.51	0.36	0.97
384	河川7	B	2			0.51		
432	河川7	E	3			0.50		
383	河川7	B	6			0.49		
809	包含層	A	18			0.48		
814	包含層	E	8			0.46		
873	包含層	E	11			0.42	0.39	0.68
363	河川7	A	2	D	1		0.40	
365	河川7	A	3	D	3		0.53	
386	河川7	A	3	B	3		0.41	
429	河川7	E	1	E	1		0.40	
430	河川7	E	5	E	6		0.42	
美國								
1165	BSK230	A	3			0.86		
1579	包含層(第8)	B	0			0.82		
1166	BSK230	A	3	A	3	0.82	0.63	0.97
1176	BSK230	A	0	A	0	0.82		
1191	BSK231	A	5	A	4	0.82		
1172	BSK230	A	0	A	0	0.74	0.54	0.83
1516	包含層(第7)	B	15			0.73		
1438	BSB230	A	5			0.72		
1581	包含層(第8)	A	13			0.70		
1601	包含層(第8)	E	4	A	0	0.70		

表2 各遺跡出土灰口壺計測データ(2)

遠賀川系壺形土器についての基礎考察 (1)

資料番号	出土地点	口頸 異紋様	口頸界直 線紋条数	頸 異紋様	頸同界直 線紋条数	頸口 率	頸胴 率	胴高 率
1691	包含層 (C117)	A	3			0.69		
1514	包含層 (第7)	B	3			0.68		
1513	包含層 (第7)	E	1	A	3	0.67	0.37	1.03
1489	SK202	E	3	A	6	0.64		
1169	SK230	A	7	A	7	0.62		
1093	包含層 (C117)	A	3	B	2	0.62	0.45	0.83
1481	SK205	A	5	E	2	0.61	0.48	
1174	SK230	A	9	A	7	0.60		
1233	SK260	D	5	A	0	0.58	0.45	0.83
1167	SK230	A	3			0.58		
1170	SK230	A	6	A	6	0.58	0.45	
1162	SK230	B	5			0.57		
1196	SK232	A	5	A	6	0.57	0.45	0.68
1165	SK230	B	7			0.56		
1164	SK230	B	6			0.55		
1479	SK205	A	7			0.55		
1173	SK230	A	13	A	14	0.54	0.35	0.90
1680	包含層 (第8)	A	10			0.53		
1483	SK205	E	2			0.53		
1163	SK230	D	5	A	0	0.53	0.50	
1220	SK244	E	3	A	10	0.53	0.30	1.01
1460	SK205	A	6	A	6	0.52		
1202	SK241	E	7	A	9	0.52		
1234	SK260	A	6	A	5	0.52	0.36	0.86
1515	包含層 (第7)	A	6			0.51		
1235	SK260	A	10			0.51		
1160	SK230	A	6			0.50		
1204	SK241	A	9	A	0	0.46	0.47	0.61
1175	SK230	E	4	E	3+4	0.45	0.33	
1232	SK260	E	3			0.44		
1439	SK230	A	8+α			0.43		
1205	SK241	E	9	A	0	0.42	0.35	0.71
1201	SK241	A	8	A	0	0.41	0.33	
1482	SK205	A	6	A	8	0.37	0.37	
1473	SK255	A	11	A	10	0.34		
1236	SK260	A	5-6+α			0.33		
大町								
240	SK509	C	0			0.89		
156	SK466	C	0	D	0	0.88	0.59	0.87
215	SK502	C	0			0.88		
510	SD411	E	1	A	4	0.87	0.47	1.14
325	SD402(内)K上層	A	3			0.87		
278	SD401	C	0			0.87		
117	SK455	A	0			0.86		
279	SD401	A	2			0.86		
160	SK466	C	0			0.85		
533	SD415	C	0	A	1	0.85		
663	SK505	C	0	D	0	0.85	0.50	
698	SD406	A	1	A	1	0.84	0.53	
534	SD415	A	0	A	1	0.84		
280	SD401	C	0	A	2	0.84	0.45	
20	SD402	C	0			0.83		
244	SK509	A	3			0.83		
660	SK505	A	2			0.83		
331	SD402(内)K上層	C	0	D	2	0.83	0.53	
159	SK466	C	0	D	1+α	0.83		
93	SK420	A	1			0.83		
662	SK505	A	4			0.82		
405	SD402(内)K下層	C	1			0.82		
242	SK509	A	0			0.82		
324	SD402(内)K上層	B	0			0.81		
574	SK423	C	0			0.81		
153	SK466	C	0			0.81		
661	SK505	A	1			0.80		
92	SK420	A	0			0.80		
697	SD406	B	0	B	0	0.80	0.45	
161	SK466	C	0	B	0	0.80	0.46	
197	SK473	C	0			0.80		
166	SK466	B	0			0.79		
330	SD402(内)K上層	C	0	A	2	0.79		
241	SK509	C	0			0.79		
274	SD401	C	3			0.78		
165	SK466	B	0+α	D	3	0.76		
401	SD402(内)K下層	C	1+(2+α)			0.75		
511	SD411	C	0	A	3	0.74	0.45	1.00
120	SK455	C	0			0.74		
328	SD402(内)K上層	A	0			0.73		
196	SK473	B	0			0.71		
273	SD401	A	1			0.71		
236	SK509	A	3			0.69		
戎町								
21	1次河道上層	A	6			0.72		
44	1次河道上層	A	0	A	0	0.68	0.52	0.73
42	1次河道上層	D	1	D	0	0.68	0.43	0.81
50	1次河道上層	A	3	A	0	0.68	0.50	
49	1次河道上層	A	4	A	4+4+1	0.63	0.60	0.76
53	1次河道上層	A	10	A	0	0.63	0.47	0.71
85	包含層	A	4	A	4+α	0.58	0.52	

資料番号	出土地点	口頸 異紋様	口頸界直 線紋条数	頸 異紋様	頸同界直 線紋条数	頸口 率	頸胴 率	胴高 率
51	1次河道上層	A	5	A	0	0.57	0.50	0.80
43	1次河道上層	A	0	A	0	0.53	0.46	0.81
22	1次河道上層	C	16	A	0	0.52		
54	1次河道上層	A	3	A	2	0.49	0.36	
45	1次河道上層	A	0	A	0	0.48	0.51	0.65
55	1次河道上層	AE	6+2	AE	8-2	0.46	0.37	
24	1次河道上層	E	5	E	4	0.40		
47	1次河道上層	A	5	A	0		0.50	
52	1次河道上層	A	3+α	A	4		0.49	
56	1次河道上層	E	9	E	7		0.46	
下島別								
3-10	土壺161	H	0	D	0	0.87	0.64	
1-4	土壺163	C	1			0.81		
3-3	土壺161	A	0	D	0	0.80	0.54	
3-1	土壺161	C	0			0.80		
1-6	土壺163	H	0			0.79		
1-7	土壺163	C	0	D	0	0.79	0.49	
1-3	土壺163	C	0			0.78		
3-8	土壺161	B	17			0.76		
1-1	土壺163	A	0			0.76		
3-2	土壺161	A	0			0.76		
3-7	土壺161	B	0			0.73		
3-4	土壺161	A	2+α			0.72		
3-6	土壺161	A	2			0.71		
1-5	土壺163	B	0			0.70		
小津派								
3118	東	C	0			0.86		
1999	中央・沼沢地	A	2	A	0	0.86	0.69	
1170	中央・SD11	A	3			0.89		
3110	東	A	0			0.84		
3116	東	A	0			0.84		
3111	東	A	0			0.82		
1169	中央・SD11	A	3			0.82		
3294	東	A	0			0.82		
3157	東	A	3			0.81		
2797	東・SD3	A	0			0.81		
1168	中央・SD11	A	1			0.80		
1193	中央・SD11	A	0			0.80		
1974	中央・沼沢地	A	0	A	0	0.80		
1117	中央・SD11	A	0			0.79		
658	中央・SK53	A	0			0.79		
2691	中央・沼沢地	A	9+α			0.78		
600	中央・SK6	E	1			0.78		
161	3号橋	A	1			0.78		
2855	東・I地点	A	0	A	0	0.77	0.48	0.91
3117	東	C	0			0.77		
3109	東	A	0			0.77		
2787	東・SD3	C	0			0.77		
1990	中央・沼沢地	A	3			0.76		
1998	中央・沼沢地	A	2			0.76		
1005	中央・SD6	A	0			0.75		
2854	東・SK4(沼沢地)	A	2	A	0	0.75	0.56	0.97
596	中央・SK4	A	3	A	3	0.75	0.44	
2051	中央・沼沢地	E	1			0.75		
3130	東	B	1			0.75		
3164	東	A	4			0.75		
702	中央・SK4(沼沢地)	A	0			0.75		
3163	東	A	2			0.74		
2002	中央・沼沢地	A	4			0.74		
3162	東	A	4	A	0	0.74		
1730	中央・自然路5	B	1			0.74		
3314	東	B	2			0.74		
1125	中央・SD11	C	7			0.74		
1124	中央・SD11	D	3+α			0.74		
1195	中央・SD11	A	0	A	0	0.73		
1989	中央・沼沢地	A	3			0.73		
3123	東	B	0			0.73		
3128	東	B	1			0.72		
4402	徳門1・SD	B	2	C	3	0.72	0.47	
1981	中央・沼沢地	B	1			0.72		
3175	東	A	3+α			0.70		
1119	中央・SD11	A	0	A	0	0.70	0.56	1.01
3121	東	C	0	D	4	0.70		
1078	中央・SD10	B	2			0.70		
3261	東	A	3+α			0.70		
3158	東	A	3			0.69		
3105	東	A	0			0.69		
2052	中央・沼沢地	E	1+α			0.69		
1009	中央・SD6	B	2			0.69		
3126	東	B	0			0.69		
162	3号橋	A	2			0.69		
1007	中央・SD6	C	3			0.69		
2099	中央・沼沢地	A	4+α			0.68		
163	3号橋	A	3			0.68		
3132	東	B	2			0.68		
3156	東	A	3			0.68		
1020	中央・SD6	A	0			0.68		
1123	中央・SD11	D	3			0.68		

表3 各遺跡出土口壺計測データ (3)

資料番号	出土地点	口頸 界紋様	口頸昇直 線紋条数	頸肩 界紋様	頸肩昇直 線紋条数	頸口 率	頸肩 率	同高 率
1733	中央・自然浜路5	A	4			0.68		
3129	東	B	1			0.68		
1118	中央・SD11	A	0			0.68		
1134	中央・SD11	D	9			0.67		
1008	中央・SD6	B	1	A	2	0.67	0.55	
3125	東	B	0			0.67		
3154	東	A	0			0.67		
1006	中央・SD6	C	0			0.66		
1576	中央・自然浜路2	D	1			0.66		
1126	中央・SD11	B	5			0.66		
2050	中央・沼沢地	E	1+α			0.66		
3119	東	C	0			0.66		
3159	東	A	2+α			0.65		
3161	東	A	1			0.65		
2079	中央・沼沢地	A	8			0.64		
2006	中央・沼沢地	A	4			0.64		
1059	中央・SD8	D	3			0.63		
1122	中央・SD11	D	3			0.63		
1140	中央・SD11	A	4	A	3	0.63	0.46	
1062	中央・SD8	E	1	D	A	0.63	0.38	
3145	東	D?	2+α			0.63		
2003	中央・沼沢地	A	4			0.62		
2009	中央・沼沢地	A	4			0.62		
2024	中央・沼沢地	A	7			0.62		
1979	中央・沼沢地	D	2			0.62		
2007	中央・沼沢地	A	4			0.62		
3188	東	A	2			0.61		
1129	中央・SD11	B	7			0.61		
1057	中央・SD8	C	2			0.61		
3106	東	A	0			0.60		
1010	中央・SD6	B	2			0.60		
2005	中央・沼沢地	A	4	A	3	0.60	0.41	
2009	中央・沼沢地	A	4			0.60		
1972	中央・沼沢地	A	0	A	0	0.60	0.46	
3160	東	A	5			0.60		
1806	中央・自然浜路1	A	8+α			0.59		
1578	中央・自然浜路2	E	2			0.59		
738	中央・SX1	A	0			0.59		
2021	中央・沼沢地	A	6+α			0.59		
1174	中央・SD11	E	2+α			0.59		
1058	中央・SD8	C	3			0.58		
2016	中央・沼沢地	A	4+α			0.58		
582	中央・SK0	A	8	A	7+α	0.58		
1973	中央・沼沢地	A	0	A	0	0.58		
1060	中央・SD8	B	4			0.58		
1145	中央・SD11	A	4			0.58	0.46	0.89
2013	中央・沼沢地	A	5			0.58		
1737	中央・自然浜路5	E	2	E	1	0.58	0.41	
3195	東	A	6	D	5	0.58	0.38	1.03
1150	中央・SD11	A	7	A	7	0.58		
1141	中央・SD11	A	5	A	1+α	0.57		
3147	東	D	8			0.57		
367	3号橋	A	9+α			0.57		
1149	中央・SD11	A	7			0.57		
741	中央・SX1	B	9			0.57		
3187	東	A	7			0.57		
1172	中央・SD11	E	1			0.57		
1175	中央・SD11	E	2			0.56		
2004	中央・沼沢地	A	4			0.56		
3178	東	A	8			0.55		
2774	東・SK2	A	5	A	3+α	0.55	0.39	
2064	中央・沼沢地	E	4			0.55		
1995	中央・沼沢地	A	3			0.55		
1121	中央・SD11	B	1	A	2+α	0.55		
1980	中央・沼沢地	D	9	B	5	0.54	0.39	
3211	東	CE	3+2			0.54		
3170	東	A	5			0.54		
3144	東	D?	3+α			0.54		
1127	中央・SD11	B	5	9?	3+α	0.54		
1144	中央・SD11	A	6	A	2	0.54		
1139	中央・SD11	A	3			0.54		
1146	中央・SD11	A	7	A	5	0.54	0.47	0.92
1133	中央・SD11	B	7			0.54		
2014	中央・沼沢地	A	5			0.53		
3176	東	A	6			0.53		
611	中央・SK31	E	1			0.53		
2790	東・SD3	AE	8+1			0.53		
1173	中央・SD11	E	1			0.53		
654	中央・SK42	A	6			0.53		
1137	中央・SD11	A	3+α			0.53		
2065	中央・沼沢地	F	2			0.53		
3183	東	A	6+α			0.53		
1978	中央・沼沢地	C	1			0.53		
3264	東	A	3+α			0.53		
3263	東	A	15+α			0.53		
1132	中央・SD11	D	6			0.53		
3169	東	A	4+α			0.52		
1063	中央・SD8	B	2	E	2	0.52	0.37	0.95

資料番号	出土地点	口頸 界紋様	口頸昇直 線紋条数	頸肩 界紋様	頸肩昇直 線紋条数	頸口 率	頸肩 率	同高 率
2061	中央・沼沢地	E	1			0.52		
2025	中央・沼沢地	A	7	A	0	0.52	0.40	0.82
1147	中央・SD11	A	6			0.51		
2038	中央・沼沢地	A	11			0.51		
1131	中央・SD11	B	5	D	10	0.51	0.36	0.96
3184	東	A	4+α			0.51		
2083	中央・沼沢地	A	7+α			0.51		
1142	中央・SD11	A	5	A	4	0.51	0.40	
3210	東	E	2	D	3+α	0.51		
3194	東	A	4+α			0.51		
177	3号橋	A	5+α			0.50		
2028	中央・沼沢地	A	8			0.50		
2041	中央・沼沢地	A	13	A	0	0.50	0.44	
3133	東	B	2	D	4+α	0.50		
3186	東	A	8+α			0.50		
3192	東	A	5			0.49		
2039	中央・沼沢地	A	12	A	2	0.49	0.47	
1148	中央・SD11	A	7			0.49		
251	3号橋	A	0			0.48		
2035	中央・沼沢地	A	9+α			0.48		
2019	中央・沼沢地	A	6			0.48		
2078	中央・沼沢地	A	3			0.48		
686	中央・SK56	E	1			0.48		
665	中央・SX4	A	8+α			0.48		
2067	中央・沼沢地	E	1	E	1	0.47	0.40	0.87
742	中央・SX1	E	5	E	7	0.47	0.40	
2023	中央・沼沢地	A	7			0.46		
70A	中央・SK0附近	A	4+3	A	0	0.46	0.47	
2015	中央・沼沢地	A	5			0.45		
2058	中央・沼沢地	E	4			0.45		
3190	東	A	4+α			0.45		
3266	東	A	7	A	5	0.45	0.47	
3275	東	A	0			0.45		
3212	東	E	3			0.43		
2093	中央・沼沢地	A	9+α			0.42		
3253	東	AE	23+2			0.42		
164	3号橋	A	1			0.42		
2063	中央・沼沢地	E	5+α			0.41		
2036	中央・沼沢地	A	9+α			0.40		
2065	中央・沼沢地	E	1+α			0.40		
644	中央・SK36	EA	7+5	AE	4+2	0.39	0.42	
630	中央・SK32	A	2	D	0	0.4	0.54	
1993	中央・沼沢地	A	2	A	2	0.45		
1996	中央・沼沢地	A	1+α			0.53		
1196	中央・SD11	A	2+α	A	2+α	0.59		
2033	中央・沼沢地	A	2+α	A	5	0.52		
2073	中央・沼沢地	AE	2+α			0.58		
3224	東	E	3	E	3	0.37		

湯ノ部								
112	SK35330	A	1	A	3+1	0.87	0.45	0.86
209	T-35包含層	A	1			0.82		
54	SD34306	A	0			0.79		
25	T-34包含層	A	2			0.79	0.53	
52	SD34306	A	0			0.78		
211	T-35包含層	A	0			0.78		
51	SD34306	C	0			0.77		
206	T-33包含層	A	1			0.76		
49	SD34306	A	2			0.76		
132	T-35包含層	E	3			0.76		
210	T-33包含層	A	3			0.74		
123	SD35304	C	0			0.73		
50	SD34306	A	0	A	2	0.73	0.52	
205	T-35包含層	C	0			0.71		
207	T-35包含層	A	2+α			0.71		
58	SD34306	A	2			0.69		
158	SK35421	A	2	A	2	0.42		
171	SK35431	A?	1+α	D	3			

中島								
29	SD-1	A	0			0.81		
26	SD-1	A	0			0.76		
25	SD-1	C	0			0.73		
1	SD-1	A	7			0.62		
5	SD-1	A	4			0.61		
4	SD-1	A	4+α			0.60		
6	SD-1	A	6+α			0.54		
20	SD-1	E	2+α			0.53		
27	SD-1	A	8			0.49		
21	SD-1	E	2			0.47		
22	SD-1	E	1			0.46		

(紋様凡例)
 A: 直線紋(無紋含む)
 B: 割出突帯
 C: 段
 D: 逆段
 E: 貼付突帯

※資料番号はすべて各報告書のものを使用。

表4 各遺跡出土広口壺計測データ(4)

編集後記

本号では、縄文時代から古代にいたる7編の論考を掲載することができました。時代はやや古い方へ偏っていますが、中身は環境に関するものや、土器論、個別の遺跡にかかわるものなど多岐にわたったものとなっています。これらの論考が、私たち埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、さらに文化財の保護・普及啓発活動の一翼を担っていくことを願っています。 (☆)

平成14年(2002年)3月

紀 要 第 1 5 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel (077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel (077)523-2580 Fax(077)524-6668